白鳥の王子 ヤマトタケル

［大和の巻］

黒岩重吾

「鳥の王子 ヤマトタケル 大和の巻」

黒岩重吾

角川書店

白鳥の王子　ヤマトタケル
―大和の巻―

発行日――平成二年十一月十五日　初版発行

著　者――黒岩重吾
発行者――角川春樹
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三
電　話――営業　〇三―八一七―八五二一
編集　〇三―八一七―八四五一
振　替――東京三―一九五二〇八　〒一〇二
印刷所――旭印刷株式会社
製本所――株式会社鈴木製本所
ISBN4-04-872606-4　C0093　Printed in Japan

白鳥の王子　ヤマトタケル―大和の巻―

〈主要登場人物〉

倭男具那——本名、小碓。後のヤマトタケル。オシロワケ王と稲日大郎姫との間に生まれた大和国の王子。武勇と優しさをあわせ持ち、人々に慕われている。

大碓王子——男具那とは双子の兄弟で兄にあたるが、性格や顔はあまり似ていない。

櫛角別王子——男具那と大碓王子の同母兄。何者かに妃とともに殺される。

オシロワケ王(景行帝)——大和の三輪王朝の王。男具那の父。

稲日大郎姫——オシロワケ王の皇后で、男具那の母。男具那の幼少の頃に亡くなり実家の印南川の傍に葬られている。

八坂入媛——五百城入彦王子の母。男具那の母の死後、皇后のようにふるまう。

両道入姫——男具那の正妃。

弟橘媛——後年、男具那が最も愛する妃となる美少女。

誉津別王子——男具那の伯父にあたり、生駒山中で仙人のように暮らしている。

和珥青魚——武術に秀でた男具那の警護隊長。

葛城宮戸彦——男具那を慕い、行動をともにする巨漢の従者。

穂積内彦——宮戸彦らとともに男具那を護る従者の一人。弟橘媛の兄でもある。

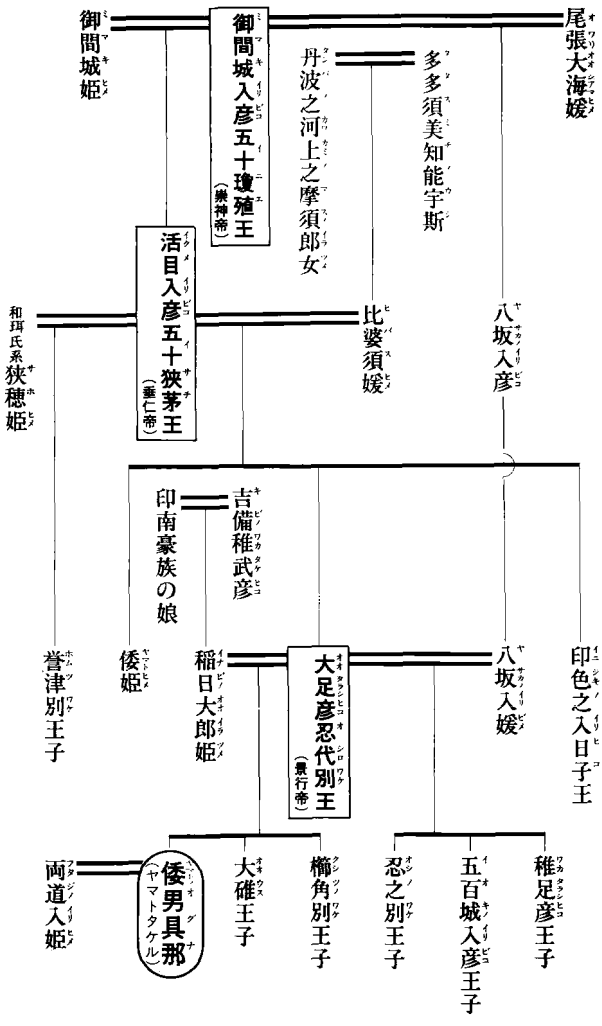
丹波森尾——印色之入日子王の警護隊長だったが、王の死後、オシロワケ王への復讐を誓う。

大根王——美濃の国造の祖。兄ヒメ、弟ヒメの二人の娘がいる。

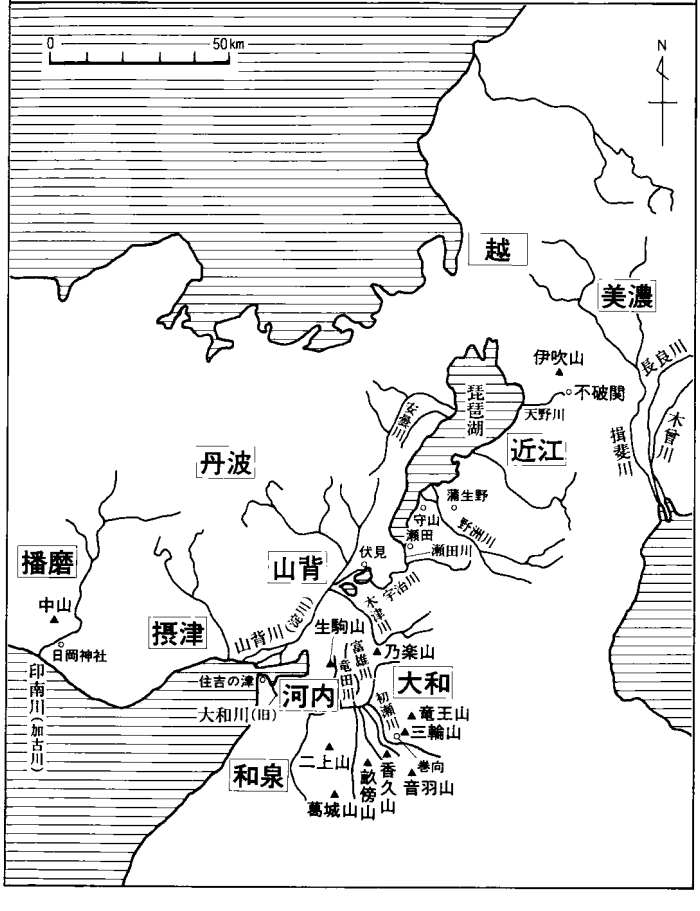
打山——稲日大郎姫(男具那の母)の警護隊長だった印南の武人。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

本書関係系図


御間城姫
御間城入彦五十瑞殖王（崇神帝）
尾張大海媛
多多須美知能宇斯
丹波之河上之摩須郎女
活目入彦五十狹茅王（垂仁帝）
和珥氏系狹穂姫
比婆須媛
八坂入彦
吉備稚武彦
印南豪族の娘
倭姫
稲日大郎姫
大足彦忍代別王（景行帝）
八坂入媛
印色之入日子王
誉津別王子
倭男具那（ヤマトタケル）
両道入姫
大碓王子
櫛角別王子
忍之別王子
五百城入彦王子
稚足彦王子

古代の畿内周辺図


0
50km
N
越
美濃
伊吹山
不破関
琵琶湖
天野川
近江
丹波
長良川
木曽川
揖斐川
満生野
守山
瀬田
野洲川
瀬田川
播磨
山背
伏見
宇治川
木津川
中山
摂津
山背川(泥川)
生駒山
日岡神社
乃楽山
富雄川
竜田川
住吉の津
大和
河内
初瀬川
竜王山
三輪山
大和川(旧)
印南川(加古川)
二上山
香久山
巻向
音羽山
和泉
畝傍山
葛城山

白鳥の王子　ヤマトタケル

―大和の巻―

カバー・扉イラスト　加瀬稔葉
装　丁　岡村元夫

一

旧暦三月上旬、大和の山野には、さくら、かたかご、あしび、つつじ、すみれなどの花々が一斉に咲き、木々の緑に妙なる彩りをそえていた。

だが、今、若者が汗塗れになって登っている山は、杉、檜、槇、樫、松などの樹木が鬱蒼と繁って薄暗く、樹林の下を歩くと花など殆ど咲いていなかった。

あちこちから差し込む木洩れ陽は刃物のように鋭い。ところどころ無数の玉が光り輝いて戯れているようだが、木洩れ陽のいたずらである。

木の香りと共に鼻孔をつくすえたような土の匂いは、何千年の落葉が腐蝕したものだった。樹林の下は殆ど灌木と熊笹で途らしい途はない。ただこんなところにも獣は棲んでいるらしく、僅かに灌木が割れていたりする。熊や猪の途であった。

下の方から若者の名を呼ぶ声が聞えて来た。連れて来た従者の声である。

若者は立ち止まると額の汗を拭った。流石に大きく呼吸をする。すでに百五十丈（四百五十

米）以上は登っているだろう。

若者はこの辺りで一番高い山に登りたかったのだ。

三輪山の奥や、北東に連なる巻（纏）向山や龍王山など二百丈（六百米）足らずの山はすでに登りつくしていた。

「無理について来る必要はない、暫く渓流の傍で休んでおれ、だが吾は何が何でも、今日は頂上まで登る、そのために夜明け前に宮を出たのだ」

若者の声は爽やかだが力強い。あちこちで山彦となって戻って来る。

若者は腰に吊した竹筒の水を旨そうに音をたてながら飲んだ。身長は高く五尺七寸（百七十糎）はあるだろう。肩幅の広さなど若者のものではない。他の若者と異なるのは脚が長く腰が高いことだ。その代り胴は短い。この若者には大勢の兄弟がいるが、このような体軀は彼一人だった。

若者の名は倭男具那、本名は小碓だった。父は大和の王であり畿内やその周辺にも勢力を張っているオホタラシヒコオシロワケ（大足彦忍代別）王（景行帝）である。ただ、タラシヒコという名は当時にはなく、七世紀の聖徳太子時代のものなので、本当の名はオシロワケである。

時は四世紀末に近い後半だが、まだ倭国（古代の日本名）には大王の称号はなかった。

倭男具那は本名を嫌っていた。男具那には同母の兄に長子の櫛角別と、双生児の大碓がいる。兄弟に碓がついたのは、二人が双生児であり、それを知った父王が驚いて臼に向って叫んだからだといわれている。その点男具那は少年という意味であり、自由奔放に生きたい王子の性格に合っていた。

和珥青魚達は、お待ち下さい、と叫んだようだが、男具那は、そち達が遅いからだ、吾には関

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

係がない、と微笑した。

男具那の微笑は、薄暗い樹林の下に籠っている山の悪霊を彼の周囲から吹き払ったほど清冽で美しかった。

その頑丈な体軀にしては顔は童子のように稚い。顔はどんな女人も眼を見張るほど整っていた。倭人にしては二重の眼は大きく、鼻は高い。濃い眉は釣り上がり、如何にも男子らしい凜々しさを与えていた。肌の色は北国の女人のように白い。

魅力的なのは奥深い大きな瞳と、白眼の部分が、赤子のように澄んで青いことだ。微笑した時など、越の沼川の底なる玉のように光る。沼川の青い玉は永遠の生命を秘めていると信じられていた。

女人達は勿論、重臣達や部下達が男具那に惹かれるのは、彼の眼に沼川の玉を想像するせいかもしれなかった。

男具那が倭の男具那と呼ばれているのは、大和国の優れた男子だからだった。その当時の倭は、三輪山麓一帯および、その南部をいう。倭を「わ」と呼ぶと、範囲が広くなり九州を含め、西日本一帯のことになる。

男具那が今登っている山は三百丈（九百米）近い音羽山だった。この山頂に立つと北方の三輪山・巻向山・龍王山やその西方の大和盆地、また後に飛鳥と呼ばれた地方や香久山・畝傍山、それに葛城の山々も眺められる。更に矢田丘陵から平群谷、河内との境に連なる生駒連山も望観出来る、といわれていた。

大和国の殆どを眺めることが出来るのだ。だが山人族の中でも音羽山の頂上まで登った者は殆どいなかった。三年ほど前に何人か登ったが戻らず、一人だけ戻ったが、その後、頭がおかしく

なり、音羽山の頂上には悪い鬼神が棲んでいる、など、あらぬことを口走り、死亡したという。
勇猛な武人もまだ登っていなかった。男具那はこれまで八合目ぐらいまでは登ったことがあった。悪天候で無念の涙を呑んで下りたのだが、それ以来、山頂に登るのが夢だった。
男具那は背に矢筒を背負い、左右の腰に弓と刀を吊し、右手には長い樫の棒を持っていた。自分で作った木刀で横擲りに擲ると、刀よりも効力があった。
刀の利点は突きの場合だ。木刀だと刀に較べ、突きの速度が遅く、相手に与える打撃も弱かった。
男具那が刀以外に樫の棒をたずさえたのは、山頂に何者が棲んでいるか、分らないからだった。
男具那は獣途を覆う灌木や熊笹を木刀で叩き折った。八合目まで来た時、前と同じように霧が湧いて来た。
天候が変るのだろうか、と男具那は一休みして、また水を飲んだ。
霧は次第に濃くなり行手が見えなくなった。噂通り鬼神が棲んでおり、これ以上登るな、と男具那に命令しているようだった。
男具那は勇猛な王子だが無謀ではなかった。素早く周囲を探ると一番背の高そうな杉に登った。幼年時代から木登りは得意である。男具那の身体は猿に化したようだ。
五丈以上はある杉の天辺近くまで登ると霧の上に出た。霧が山を取り巻いているのは六合目から八合目あたりまでだった。
陽は眩しいほど輝き、青々とした山頂を照らしている。多分半刻（一時間）近く待てば霧は晴れるに違いなかった。
三輪山ははっきり見えるが、巻向山・龍王山には雲が垂れている。三輪山麓の宮の辺りは春

霞でよく見えない。

男具那はものの気配を感じた。男具那には特別の能力があり、人が感じないものでも感じ取ることが出来るのだ。男具那は本能的に頂上附近を見た。十数羽の小鳥が舞い上がっている。三百丈近い山の頂に何故小鳥がいるのか。高い山を好む鳥がいても別に不思議ではないが、何かに怯えて飛び立った感じだった。今まで一羽も姿を見せなかった小鳥達である。一斉に飛び立ったのがおかしい。男具那は半ば眼を閉じ、山頂に視線をこらした。山頂は厚い緑の布を巨岩で突き上げたような形だった。男具那の視線は痛いほど山頂附近に注がれている。もし男具那が眼を見開いていたなら痛みで眼は潰れていたかもしれない。

男具那は山頂の樹林の下に何者かがいるのを感じた。鬼神か、獣か、それは分らない。

男具那は杉の木からすべり落ちるように降りた。

男具那は足音をしのばせ、気を鎮めて登り始めた。速力は半分ぐらいに落ちたが神経が周囲に集中している。九合目あたりまで来ただろうか。男具那は獣の匂いを嗅いだような気がした。男具那は刀を抜くと獣途に伏せた。陽が当らない山肌は意外に冷たい。まだ土中は凍りついていそうだ。腐蝕した落葉は湿り冬の季節を残していた。

男具那は堆積している落葉に耳を当てた。凄まじい速さで獣が下りて来る音を男具那は感じた。一匹ではなかった。二匹以上だが三匹なのか四匹なのかそれは分らない。

山犬のような獣を相手にする時は木刀より刀の方がずっと役に立つ。男具那は刀で獣途の傍の灌木を伐ると自分の前に積み重ねた。理由は分らないが今、何匹かの獣が自分を襲うべく駈け下りて来ているのが分るのだ。

灌木を五尺（一・五米）近い高さに積み重ね、その内側に刀を握ったまま男具那は蹲った。も

う獣の足音がはっきり聞える。男具那は左指で軽く膝頭を叩きながら獣の速さを計る。指が速まる足音に合致し耳が音の大きさで距離を計った。男具那が両手で刀を構えた時、獣は五尺近くに迫っていた。獣が初めて咆哮した。積んだ灌木を跳躍し、二匹の山犬が牙を剝いて男具那に襲いかかった。男具那が突き上げた刀は山犬の喉を刺し、血が噴出する。そのまま男具那は身を翻し背を灌木に埋める。二匹目の山犬は男具那の頭を掠めながら転がった仲間の山犬に激突した。だが相手は転がらなかった。どうして踏みとどまったのか分らない。横に跳ぶと斜め下から男具那に襲いかかって来た。流石に跳躍するだけの脚力は失われていた。男具那の刀は山犬の頭蓋骨から下顎まで斬り裂いた。両腕に衝撃が走ったが痺れるほどのものではない。

幼少時代から木の枝を斬っては、一人武術の修業を続けて来た男具那の両肩は、猪を斬った時の衝撃にも耐えたのだ。

男具那はもう一匹の唸り声を耳にした時、地面に伏せていた。狼を思わせる牙が木製の矢筒に咬みついた。男具那が刀を持ったまま一転すると、山犬も男具那の背から転がり落ちた。男具那が刀を手もとに引いたのと山犬が体勢を立てなおしたのとほぼ同じだ。

山犬が口を裂けるほど開き、真赫な舌をはっきり見せて跳びかかって来た時、男具那は刀の切っ先を思い切り口中に突っ込んだ。直に衝撃が腕から肩に来た。喉から背骨まで貫かれながら山犬は男具那の刀を三度咬んだ。幾ら山犬の歯が強靭でも、歯で鉄刃を咬む音は痛ましい。三度咬むと山犬は信じられないほど悲しそうな声を出した。男具那の刀が岩に刺さったように重くなった。息が絶えたのだ。男具那が刀を引き抜くと半分切れた舌が血と共に山犬の口から落ちた。

男具那にはその舌がまだ動いているように思えた。生命が失われ縮んでいるのかもしれない。

男具那は無造作に舌に刀を突き刺して持ち上げた。男具那の眼の前で、血塗れの山犬の舌はだ

らりと垂れ、もう動かない。その舌を睨む男具那の眼にはまだ憤りの光が宿っていた。
この三匹の山犬達はただ山に登ろうとした男具那を、何の予告もなく、咬み殺そうと襲って来たのだ。獣であれ、男具那はそういう卑劣な敵を許すことが出来なかった。
生命を狙った敵は、憎み、殺すというのが男具那の信条だった。
男具那はまだ若い。こんなところで憐みの気持を抱くようなら、生き残ることは出来なかった。大人しい長兄の櫛角別王子はともかく、次兄の大碓王子は何故か男具那を憎み、生命を狙っている気配があった。
王族の中にも敵は多いのだ。
それにしても山犬は何故、吾を襲って来たのだろう、と男具那はまだ血を垂らしている舌を眺めながら考えた。
杉の木に登り頂上附近を眺めた時、小鳥達が怯えて舞い上がった。あの時、山犬達は男具那を襲おうとしていたに違いない。
男具那を危険な侵入者と山犬達が視たせいか。それとも山犬達を支配している鬼神が棲んでいるのだろうか。
男具那には山犬達が勝手に頂上から駈け下りて来たとは思えなかった。何者かの命令によって山犬達は動いたに違いない。
そう判断した時、男具那は刀を振り犬の舌を熊笹の繁みに放った。布で汚れた刀を拭いた。矢筒を下ろし調べて見ると狼と犬との間のような鋭い牙痕がつき、矢筒の端に罅が入っている。
恐ろしいほど鋭い牙だった。もし矢筒を背負っていなかったなら、首の半分は喰い千切られていたに違いなかった。

男具那は恐怖よりも憤りを覚えた。
憤りは総ての筋肉を刺戟し、男具那の口は自然に開く。男具那は刀を振り上げ、獣のように咆哮した。
「王子様、何処におられる？」
下の方から聞えて来たのは男具那の警護隊長和珥青魚だった。
「様など要らぬ、王子で良いのだ、警護隊の者は友人でもある、何度も申しているぞ、吾の跡は分るだろう、灌木は叩き折っているからな」
「はっ、そこでお待ち下さい、山頂には我等も必ずお供つかまつります」
「ああ待っておる、大竹と小竹は？」
「はあ、やつかれ（臣）のすぐ後ろに……」
「すぐでもあるまい、かなり離されておるだろう、まあ良い、ゆっくり参れ」
男具那は哄笑すると今度は熊笹を伐り払い、葉を座蒲団代りにして坐った。
青魚は現在の奈良県天理市近辺に勢力を張った新興豪族、和珥氏の支族の出だった。男具那より二歳上の二十一歳だが、泳ぎは男具那よりも勝り、武術も男具那に勝るとも劣らなかった。
和珥氏は海人族の血を引いており、百数十年以上も前に、邪馬台国の卑弥呼が、倭連合国の女王をしていた時代、安曇氏と共に水軍力で暴れたものだ。三世紀の後半、邪馬台国は東遷し、三世紀末、大和の三輪山麓に宮を持った。
和珥氏も水軍力を活かし、邪馬台国と共に日本海を東遷し、近江に勢力を張ったが、今は南下し、現在の地を勢力圏としている。
海人族だけに、各地の海人族と親しく、尾張氏、息長氏の祖、安曇氏などを通して交易を行な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.